

研究論文

流行作家「内藤千代子」の出現と受容にみる明治末期女性表現の新たな可能性

Birth and Accept of a Popular Novelist “Chiyoko Naito”, and a New Possibility of Women’s Expression in Late Meiji Era

嵯峨 景子 Saga Keiko

東京大学大学院 学際情報学府

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

要 旨

本稿は明治・大正期に活躍した流行作家内藤千代子に焦点を当て、明治末期における女性表現と文学活動に新たな可能性を示すことを目的とする。明治期に作家となるためには、文壇とのコネクションを形成するというプロセスが必要であった。内藤千代子は明治末期に雑誌『女学世界』における投稿という手段で頭角を現している。若い読者に支持をされ、文壇とは異なった場で受容された人気作家であった。内藤は当時尖鋭的なトピックであった男子学生を相手とした男女交際を描き、さらには一高帝大の男子学生文化もモチーフとして作品に取り入れ、男女学生から支持を集め、著作がベストセラーとなった。同時代における人気の高さにも関わらず、現在内藤千代子は忘れられた作家である。本稿では内藤千代子という作家の特徴をまとめ、女性作家の系譜のなかへの位置づけを試みる。さらに内藤千代子の受容のされ方や文学研究における周縁化が、文壇との繋がりやユースカルチャーのなかでの受容に起因するものであることを示す。

Abstract

This paper focuses on a popular novelist Chiyoko Naito, and aims to show a new possibility of women’s expression and literature in late Meiji era. To become a novelist in those days, it was needed to make a connection to the “Bundan,” an authoritative literature world. Chiyoko got popular for her fresh writing contributed to the magazine “Jyogaku Sekai”. Becoming a popular writer, she had no connection to the “Bundan,” and it was an exceptional way for novelists. The motifs of Chiyoko’s novels were girls’ romantic relationship with male students and those students’ custom. These topics representing the youth culture were progressive and an expression of the youth fashion. Though Chiyoko was a very popular writer representing a kind of the youth culture, her reputation passed into oblivion and her name didn’t seem to get any position in the literary world. This paper considers Chiyoko’s feature and ascertains her contribution for the progress of the self-expression of women. And this paper also shows that the cause for oblivion of Chiyoko is related to the lack of the connection to the “Bundan” and to her unique presence which was deeply tied with the youth culture in the late Meiji era.

1. はじめに

1.1 問題意識と視座

フェミニズム批評やジェンダー研究の発展、また文学の領域におけるオーディエンスやメディア論の視点の導入などにより、明治期における女性作家研究や女性表現の再検討が近年盛んに行われている。かつては「一葉以前」と括られ、論じられることの少なかった明治20年代前後における女性作家の活動と表現が取り上げられ、家父長制をはじめとする社会規範と自我のせめぎ合いのなか、女性が文学を獲得し、自己表現を行うに至ったプロセスとその意義が明らかにされつつある^[1]。自由民権運動の女権家として出発した中島湘煙の演説や評論『函入娘・婚姻之不完全』、女性作家による初めての近代小説とされる三宅花圃の『薺の鶯』、さらには口語自叙体を用いて離婚を描いた清水紫琴の『こわれ指輪』をはじめ、さまざまな作家や作品の分析が行われ、近代女性文学の確立期における研究の蓄積は厚みを増している^[2]。また時代を下り明治後期に目を転じ

ても、樋口一葉の没後、「一葉」という記号と格闘しつつ自らの表現と文体を形成していった平塚らいてうや田村俊子をはじめとする女性作家の分析^[3]、また個別の作家研究に留まらず、『女子文壇』における投稿の分析を通じてジェンダーの問題を論じた研究などがある^[4]。女子中等教育の確立と普及とともに女性の読み書き能力が向上し、文学を志す女性が増加するという時代状況のなか、女性がどのような表現を獲得していったのかが鋭く論じられるようになっている。

このように明治期における女性文学と女性作家研究は発展を遂げつつあるが、十分に論じられていない領域が存在する。本稿が主題として取り上げて分析を行うのは、これまでの文学研究では周縁化されている領域、明治末期において大衆的な人気を得ていた書き手の誕生と受容の様態である。本稿ではこうした書き手の存在に着目し、具体的には内藤千代子という、明治末期に登場し、若い青年男女から絶大な人気を誇った作家を取り上げて分析を行っていく。のちに示すように内藤千代子は、雑誌の投稿を通じて頭角を現し、17歳の若さで発売した著作

がベストセラーになるなど、明治・大正期における女性作家としては異例の商業的成功をおさめた人物である。しかし現在では内藤の名前と作品は忘れ去られ、文学史や女性作家研究においても取り上げられることは稀である。

ここで初めに、内藤千代子という人物を取り上げて論じるのは、現在では無名の一作家の個人史を語るためではない点を確認しておきたい。本稿が内藤千代子という「忘れられた作家」に焦点を当てて分析を行うのは、この作家の出現のプロセスや受容の有様が、雑誌やジャーナリズムと作家の関係性、さらには明治末期の女性表現に新しい視座を提起するものだからである。また明治期の女性作家として異例の商業的成功をおさめている事実を示し、そうした同時代における人気が何を意味するのか、文学や女性作家をめぐる諸問題について再考を促すことを試みる。

1.2 内藤千代子の先行研究とその課題

はじめに内藤千代子を巡る先行研究を概括し、その整理を通じて本稿の課題と視座の確認を行う。

内藤千代子は文学研究において取り上げられることは稀であり、文学史にその名を見ることはほとんどない。そうした状況のなか、数少ない言及として文芸評論家の板垣直子による内藤千代子評がある。板垣は『『女学世界』に当時の青春男女の生活を描いて、風俗的な中間読物をのせた内藤千代子という、今日でいえば『マス・コミの才女』が現われた。彼女の『人気』が、小説をかくことに追いこんだけれども、そこでは娯楽ものにさえ、実らなかった。』と述べている^[6]。内藤千代子という作家を女性作家研究の系譜のなかで取り上げ、さらに当時のマスメディアやジャーナリズムと結びつけている点で慧眼が光るが、内藤への評価は否定的であり、また記述も数行に留まり、議論は深められていない。

内藤が時折言及される領域として、内藤が生前暮らした神奈川県鶴沼の郷土史^[6]や古書を主題とした一般書籍^[7]などがあるが、いずれも断片的な紹介に留まるものである。こうしたなか、現在における最もまとまった内藤千代子論の先行研究として森山敬子による論考が挙げられる^[8]。森山は丹念な資料調査を通じ、忘れられた作家である内藤千代子の生涯とその著作活動を女性史の視座で掘り起こしている。しかし森山は内藤の著作に関しては、その世界が「あまりにも狭隘」であると指摘し、「周囲に仕立てられてスターダムに上り」、また「消えるべくして消えた作家であったと言うしかない」と評価を下している。森山以外では仙波千枝が内藤を『女学世界』における「寄書家」と位置づけて言及を行っている^[9]。このように先行研究では内藤の生涯や『女学世界』における活動についてはある程度明らかにされているものの、明治・大正期の女性表現の系譜のなかで十分に論じられているとはいえない。また3節で明らかにするように、森山や仙波など内藤千代子に言及した先行研究においても見落とされている最晩年の著作がある。基礎情報の整理という観点からも、改めて内藤千代子を論じることが求められる。

内藤千代子という作家を捉えるうえで重要な論点となるの

は、同時代における圧倒的人気と話題性、またその後の忘却と文学史からの排除である^[1]。大衆的人気と、それと相反する文学史における評価という観点は、黒岩比佐子による村井弦斎研究と視座を共有するものといえる。ベストセラー『食道楽』およびその著者村井弦斎について黒岩は「この『食道楽』という小説は、当時から今に至るまで、文学史上ではめったに取り上げられることがなかった。はたしてこれは論じるに足る『小説』なのか、と疑問符をつけて見られたに違いない。」と述べている^[10]。黒岩の提示するこの問題は、本稿の主題である内藤千代子にも通じるものである。

こうした状況をふまえ、本稿では以下の構成で分析を行っていく。2節において、明治後期において盛んになった雑誌における投稿と文学の関係性を整理し、作家になるためのルートを確認する。この作業を行ったうえで、3節では作家内藤千代子がどのように登場したのか、作家デビューのプロセスとその意義を論じる。4節では内藤千代子の受容の様相を明らかにし、同時代における内藤千代子に対するまなざしと作家としての立ち位置に対する考察を行う。また1910年代の女性作家における内藤千代子の位置付けを試みる。

2. 投稿雑誌の隆盛と作家になるためのプロセスについて

2.1 明治後期の投稿雑誌の出現と作家・文壇の関係性

本項では明治後期における投稿雑誌や作家をめぐる状況をまとめ、内藤千代子が登場した時代背景を描いていく。

近代日本における女性雑誌の大きな転換点となったのは、1899（明治32）年における高等女学校令の公布である。高等女学校令により近代日本の女子中等教育が確立された。女子教育の普及は雑誌市場の拡大や雑誌の商業化を招き、そのなかで「書く」という表現行為、文学への欲望が浮上する。このような状況を背景に、明治30年代後半には投稿をメインコンテンツとした雑誌の創刊が相次いだ。

『女子文壇』は1905（明治38）年に創刊された女子専門の投稿雑誌である。詩人の河井醉茗などが中心となり編集を行っていた。『女子文壇』出身の作家としては水野仙子や歌人の今井邦子、また生田花世をはじめのちに『青鞥』に参加する者の名も数多く誌面に見られる。『女子文壇』の投稿は「美文」「消息文」「雑文」「短篇小説」「新体詩」「短歌」「俳句」などの項目があり、また創刊直後は投稿が雑誌全体の8割を占めるなど、文学志望の女性の鍛錬場としての役割を果たしていた^[11]。

また1906（明治39）年、博文館は『文章世界』という雑誌を創刊している。「蒲団」などで知られている自然主義作家の田山花袋が主筆を務め、多くの文学青年たちが集い投稿した雑誌であった。なお『文章世界』は男性のみの雑誌ではなく、吉屋信子や水野仙子をはじめ、のちの女性作家たちの作品も掲載されている。近松秋江が、「誰であつたか、当今の文壇で、『文章世界』ほど青年文士を養成している雑誌はないと言つたが、確かにさうである。」と記しているように、『文章世界』においては多くの文学青年たちが研鑽を積んでいた^[12]。

『女子文壇』や『文章世界』という投稿雑誌の特徴は、誌面

の大半が読者からの投稿で構成されていること、また男性作家の選者がおり、彼らが作品を選び選評をつけている点である。『女子文壇』では河井醉茗、『文章世界』では田山花袋などが選者となっていた。

投稿雑誌が創刊され隆盛をみせる一方で、こうした雑誌への投稿が直ちにアマチュアからプロの書き手へという経路を切り開いたわけではない点も確認しておきたい。明治後期において投稿が作家へとステップアップするための手段として登場したが、投稿雑誌はあくまで文壇に参入するための足掛かりにすぎなかった。投稿を通じ、選者である作家に認められて門下に入るなど文壇とのコネクションを作り、『新潮』や『中央公論』などの文芸誌に作品を発表して、作家としての立ち位置を築いていく必要があった。

大宅壮一によれば当時社会的に認知される、影響力を保持するような文筆家たりえるためには、文壇という名で称されるギルド的世界に入門、参入する必要がある、また文壇は文学界において「ある程度まで市場を独占する力を具えている」。そのため、「多くの文学志望者は、実は文学志望者ではなくて大抵文壇志望者である」という^[13]。大宅はこの文壇について、上記した市場の独占、徒弟制度による養成、また「素人」と「文人」の間の截然たる区別といった性質を挙げて整理している。

作家として世に出るためには、名のある作家に弟子入りをし、面倒をみてもらいつつ文章修業を積むことが慣例的に行われていた。こうした徒弟制度的な修行形態は、女性作家とて例外ではない。樋口一葉は半井桃水に入門して指導を受け、作家デビューを果たしている。また内藤千代子と同時代の作家である田村俊子も、1902（明治35）年に満18歳で幸田露伴に入門をしている。田村俊子が文名を上げたのは1910（明治43）年に大阪朝日新聞の懸賞に2等当選した小説「あきらめ」であるが、作家としてのキャリアの出発はあくまで伝統的な形式にのっとったものであった。また『女子文壇』出身の代表的作家として知られている水野仙子は『女子文壇』や『文章世界』の投稿家として頭角を現し、『文章世界』に発表した小説「徒労」が認められて1909（明治42）年に田山花袋に弟子入りをし、自然主義風の作品を発表している。地方に住む少女が投稿雑誌で文章修行を行い、文壇作家の門下に入り指導を受け、文芸誌に作品を載せて文壇に参入するという作家への上昇プロセスがここで行われている。

ここまで確認したように、近代日本において作家となるためには、常套のルートが存在した。文壇という場が確固として存在し、そこに参入するための手段としての徒弟制度による指導が行われていた。そうしたなか、明治30年代後半より投稿雑誌が多数創刊され、雑誌への投稿を通じて文章修行を行う風潮が出現する。ここで投稿という行為は文壇に参入するための足掛かりとして用いられている。作家の木村毅は投稿時代を回想し、「投書は文壇に出られる有力な一階梯だと思った。」と述べている^[14]。徒弟制度にせよ投稿にせよ、文壇とのコネクションを作り、文壇という場において作家としての立ち位置を築くことが必須であった。

2.2 『女学世界』における投稿とそのポジション

ここまで明治後期における投稿雑誌と作家となるためのルートの確認を行ってきた。本稿の主題である内藤千代子という作家をみるために、内藤の活動の母胎となった『女学世界』とそこにおける投稿について考察を行う。

『女学世界』は1901（明治34）年、博文館より創刊された女性雑誌である。創刊時は良妻賢母主義のもと、啓蒙的な女性総合雑誌としての特徴を有していた。読者層は女学生から主婦まで幅広く、1917（大正6）年以降は読者年齢の低下が見られるものの、若い女性を中心に広く愛読された雑誌であった。創刊号の目次は「論説」「講義」「伝記」「学術」「技芸」「小説」「家庭」「雑録」「文苑」「才媛詩藻」という多様な項目立てで構成されていた。こうした項目立ては、1908（明治41）年1月より廃止となっている。これ以降は『女学世界』の誌面構成が変わり、以前のような論説記事が減少し、そのかわりに実用記事が増え、また読者投稿の募集が盛んになるという変化が生じた。誌面における読者投稿の比重の増加は先に述べた『女子文壇』や『文章世界』をはじめ、投稿雑誌の増加等を背景にしたものであろう。1908（明治41）年11月に発行された定期増刊号『ころの日記』より開始された賞金付きの投稿懸賞文は読者からの好評を博し、またこの懸賞のなかから読者に絶大な人気を集めた内藤千代子をはじめとする書き手が出現した。

このように1908（明治41）年頃より『女学世界』において投稿が重要なコンテンツとして浮上してきたが、同じ「投稿」という単語であっても『女子文壇』や『文章世界』といった雑誌と、『女学世界』とではその位置づけや機能が明確に異なることをここで確認しておきたい。『女子文壇』や『文章世界』は文学青年、文学を志向する女性たちが集う雑誌であり、選者も文壇の作家であったことは先に述べた通りである。こうした雑誌における投稿は、作家となるための文章修行という特徴があり、またこの投稿を通じて文壇に参入するという文壇や文学への志向が内在するものであった。これらの投稿雑誌は、若手作家養成の場としての機能も果たしていた。

それに対して『女学世界』は文学志向の読者向けではなく、一般の女性雑誌であり、作家養成が投稿の目的ではなかった。編集主任の松原岩五郎は懸賞文の募集を行った理由として、「名家の教訓や、実際家の経験談以外、うるほひのある雑誌の読物の一として才媛の懸賞文募集を企てた」と記している^[15]。「うるほひのある雑誌の読物」としての位置づけであった投稿は、あくまで雑誌における一コンテンツであった。そうしたなかで、内藤千代子という少女の作品が注目を集め、読者の支持を受け、さらには流行作家となり一世を風靡するという現象が生じた。

3. 流行作家内藤千代子の誕生

3.1 内藤千代子の生涯と著作活動

本節では内藤千代子という、鶴沼に暮らしていた一少女が、『女学世界』への投稿を通じて作家となったプロセスを検証していく。内藤の登場から最初の著作『スイートホーム』が出版される前後の状況に焦点を当てて分析を行い、この作業を通じ

て内藤という作家のポジションを明らかにすることを目指す。

具体的な分析に入る前に、作家としての内藤千代子の経歴と著作活動を確認する。内藤千代子（1893-1925）は幼少の頃に家族で神奈川県鵠沼に移り住み、以後鵠沼で暮らして執筆活動を行った。主に『女学世界』を執筆の場とし、明治末期から大正時代に作家として活躍をした。

表1 内藤千代子著作リスト

タイトル	発行年	出版社	備考
スキートホーム	1911年9月	博文館	
ホネームーン	1911年12月	博文館	
エンゲージ	1912年12月	博文館	
生ひ立ちの記	1914年10月	牧民社	
惜春譜	1915年6月	牧民社	
生ひ立ちの記	1916年5月	如山堂	惜春譜との合本
冷炎	1916年11月	京橋堂	
春雨	1918年1月	京橋堂	
毒蛇	1919年10月	三徳社	
あ、青春	1922年1月	三徳社	春雨の異装本

（出典）筆者作成

表1は内藤千代子が出版した著作リストである。合本を含め、内藤は生涯に10冊の著作を残している。森山や仙波の先行研究では『毒蛇』が内藤の最後の著作とされているが、実際にはさらに後年、1922（大正11）年1月に三徳社から『あ、青春』が刊行されている。筆者の調査で現物確認しうる限りでは、『あ、青春』は新作ではなく『春雨』の異装本ではあるが、いずれにせよ内藤が作家活動を行った時期特定にとって重要な刊行物であり、彼女のキャリアに関するデータは更新される必要がある。

内藤の生い立ちにおいて非常に特異な点は、一切の学校教育とは無縁のまま育っていることにある。女子教育が普及しつつある時代であり、また明治期の女性作家が教育や出自に恵まれている人が多い状況のなかで、尋常小学校にも通うことがなかった内藤の経歴は極めて異例と言える。

彫物師である父から家庭教育を受けて育った内藤は、結核で父を亡くした後は母妹と暮らす境遇のなか、文学への憧れを抱き、1908（明治41）年より『女学世界』への投稿を行うようになった。内藤は1908（明治41）年11月定期増刊号『こゝろの日記』に3等入選を果たした「田舎住居の處女日記」で一躍注目を浴び、以後も頻繁に作品が掲載されるなど、『女学世界』の常連投稿家となり、誌上で存在感を増していった。

内藤は雑誌『女学世界』における一素人の投稿家として出発しているが、その作品が読者の人気を博し、雑誌内におけるスターとなり、それが昂じて作家としてデビューするに至った。その過程を次項で考察する。

3.2 『女学世界』投稿家から流行作家へ

内藤の名前が初めて『女学世界』誌上に掲載されたのは、1908（明治41）年8月、短文欄に掲載された「心ゆく夕」である。

以後9月「避暑地より」（短文で甲賞受賞）、10月「栗にそへて」、11月「或る夜」と短文欄での掲載が続く。そして11月定期増刊号『こゝろの日記』の懸賞に投稿した「田舎住居の處女日記」が入選し、内藤は一躍『女学世界』読者の注目を集めることとなる。「平々凡々の事を書いてこれほどに読ますは尋常の業にあらず」^[16]と評されたこの作品は内藤の出世作となった。

以後『女学世界』には内藤の投稿した作品が多数掲載されるようになり、1909（明治42）年は短文を含めて計7作品、1910（明治43）年は14作品、さらに1911（明治44）年は計11作品が雑誌に発表されるなどの活躍ぶりをみせている。

内藤の作品は独特の口語体による会話文とハイカラと呼ばれたモチーフ選びや洒落な文体、また一高や帝大などの男子学生との交流や交際をモチーフとして描いている点、さらには鵠沼という風土が作品と強く結びついているところに特徴が見られる。『女学世界』読者にその名を知らしめた「田舎住居の處女日記」をはじめ、日記や随筆などが人気を集め、話題となった。

内藤の文章が度々『女学世界』の懸賞文として掲載されるようになると彼女の作品は読者によって強く支持され、アマチュアの投稿家に留まらない影響力を持つようになる。『女学世界』の読者欄である誌友倶楽部には内藤作品への感想や内藤宛の読者投書^[2]が急増した。以下の投書は、読者欄に掲載された内藤千代子に言及をした読者からの葉書である。

本誌愛読の皆様方、いつもいつも才筆お振ひ遊ばす内藤千代子様を思はれぬ方がふいませうか、心の日記に心の秘密、扱ては驚く手紙に小説の松風に、逝く春など、近くは嫁がぬ人、もうもう其他一ツとして千代子様がお筆の示される限り私は読む度毎に体がこうしびれた様に感じ魂はみんなお作の中へ飛んで仕舞つて何とも彼とも丁度お酒によした人はみなこんなだらうと思ひ升わ、ホ、、、、、ほんとうにお上手です、ね、願はくば記者様よ、一度此の方のお写真掲げて頂戴な、諸嬢方も必ず御同意でせうと思ひ升、ア、私鵠沼の近くだつたら毎日腰べん当でさがし歩きますのにね、ホ、、、、、あのそれから、今後お作どしどし御掲載下さいな、ますます歓迎愛読しませうね。（略）大阪府下愛読者（1910年1月）^[2]

十一号、大へんようございました、（略）、私の学校でも、又他より転校なすつた方より伺ひましても、いづれも千代子様の稀世の御文才に敬服し崇拝してる方ばつかりでございませ、毎日毎日千代子様の御噂さばつかりしてなつかしがつて居りますの、どうぞ益々御ふるひ遊ばして下さいませ。ゆかり（1911年12月）

『女学世界』内において、内藤はアマチュアの投稿家でありながら、その存在感は人気作家に伍するようになっていく。このように読者欄において内藤千代子の人気が可視化され、ブームが増幅され、鵠沼で暮らす雑誌の一投稿家である内藤千代子は『女学世界』のスターとなった。

『女学世界』の編集主任であった松原岩五郎は内藤について、「田舎むすめは一躍して女王（クイン）の宝冠を戴き、十万

読者を独特の魔術に引きつけて渇仰的とならしめたのである。」と述べている^[17]。また内藤が読者から強い支持を受けたことは、博文館の社史からも伺うことができる。「其文(筆者注: 内藤千代子の文章のこと)は毎編若き女性間に盛んに愛読せられ、為に『女学世界』の発行部数を本館各雑誌の中の首位に上らしめしことあり」と史料にも記されているように、内藤の人気は雑誌の売り上げ増大の要因として認識されるほど大きな影響力を持っていた^[18]。

学校教育を受けずに育ち、文壇とのコネクションもなかった内藤は、本来は作家として名を成せる環境とは遠いところにいた。『女学世界』に掲載された日記等の投稿作品も、あくまでアマチュアの読者から文章を募集する懸賞企画内のものであった。その先に作家デビューが既定路線となっているはずもない。

内藤千代子は『女学世界』内における人気投稿家としての地位を確立したが、本来それはあくまで雑誌内の一人気読者というアマチュアの立場にすぎないものである。しかしこの内藤人氣に着目し、作品を本にまとめて出版を行った編集者の働きにより、内藤は『女学世界』のアマチュアの投稿家から作家への第一歩を踏み出した。博文館社員で雑誌『冒険世界』の編集者であった河岡潮風⁽⁴⁾は内藤の才能と読者人氣の高さに注目し、博文館に出版を働きかけ、1911(明治44)年9月に『スキートホーム』が発売される運びとなった。『スキートホーム』の装幀は杉浦非水、挿絵は竹久夢二が手がけている。出版時、内藤は17歳の若さであった。

このように『女学世界』における一投稿家にすぎなかった内藤は、その文才と読者人氣の高さに注目した編集者の後押しで作品が出版されるという経緯のもとで作家へのスタートを切っている。内藤の著作が出版されたプロセスにおいて、先述したような既存の文壇の評価は介入しておらず、あくまで『女学世界』を母胎とした読者からの支持を広く集めたことが作家としてデビューする原動力となっている。この時代における作家となるための規定のルート、文学系の投稿雑誌への投稿を通じて文壇とのコネクションを作り、やがては文芸誌などに作品を発表するといったプロセスを経ることなく、内藤千代子は『女学世界』の投稿家という立場のままで著作が出版され、作家となった。世間的に無名で、文壇的な評価もないアマチュアの書き手に編集者が着目し、作品を世に出すことは現在では珍しくもない現象ではあるが、明治末期という時代状況や文学状況のなかでは極めて希有な事例として注目に値する。

3.3 ベストセラーとしての『スキートホーム』

内藤千代子の作家として特筆すべき点は、読者人氣に支えられた、文壇の権威とは無縁の形態で出現した書き手である点のみならず、大きな商業的成功をおさめてもいることである。明治期のベストセラーとしては尾崎紅葉の『金色夜叉』や徳富蘆花の『不如帰』などが知られているが、いずれも男性作家の手による著作である。

本の発行部数という出版の内幕を直接示すデータは残されていないため、奥付や広告などの周辺資料から、内藤の最も売れた著作である『スキートホーム』の発行状況を考察していく。

さらにその部数を他のベストセラーや商業的成功をおさめた本と比較し、同時代の中での売り上げの位置づけを試みる。

出版時は博文館側が難色を示した『スキートホーム』であったが^[19]、発売されたわずか半年後の1912(明治45)年3月15日に13版まで増刷され、また1913(大正2)年9月15日発売の『女学世界』には『スキートホーム』26版の広告が掲載されるなど、結果的に『スキートホーム』は出版社の予想を超える高い売れ行きをみせた⁽⁵⁾。発売時期にやや隔たりがあるが、明治の代表的ベストセラーである徳富蘆花の『不如帰』、さらには吉屋信子の人気少女小説『花物語』の重版状況と比較するのは、『スキートホーム』の売れ行きを考察する一つの参考指標となりうるであろう。

『不如帰』は1900(明治33)年1月に初版2千部が発行され、1901(明治34)年は16版まで、1906(明治39)年は26版までと増刷を重ねている^[20]。『スキートホーム』は、『不如帰』発行直後の重版状況と比較をしても遜色はない。また尾崎秀樹が「吉屋信子の『花物語』ほどよく売れた少女小説はない。」と述べているように、『花物語』は1920(大正9)年2月に洛陽堂から出版されて以降、翌年には4版、1921(大正10)年秋には9版まで発行を重ねている^[21]。これらの作品の重版状況と比較しても、内藤の『スキートホーム』の発行部数の多さが伺える。内藤千代子は明治末期の女性作家としては異例の商業的成功をおさめた作家であった。『スキートホーム』の好評を受け、1911年(明治44)年12月に『ホネームーン』、さらに1912(大正元)年12月に『エンゲージ』とわずか一年ほどの間に博文館から著作が3冊発売されるなど矢継ぎ早に作品が出版され、いずれも高い売れ行きを保ち、内藤は一躍時の人となった。

ここまで見てきたように、一読者であった少女が投稿を通じてベストセラーを生む人気作家になるという内藤千代子の登場には、従来の作家デビューの形態とは根本的な相違が見られる。内藤は学校教育や出自には恵まれておらず、また文壇作家へ弟子入りをして文章修業を積むこともなかった。内藤千代子の著作が出版されたプロセスにおいて、既存の文壇の評価は介入しておらず、『女学世界』を母胎に一般読者からの支持を広く集めたことが作家としてデビューする原動力となっている。文学的な権威や評価とは関わりのないところで、人気作家内藤千代子は誕生したのである。

4. 作家内藤千代子のポジションとその意義

4.1 若者文化において受容された内藤千代子

本節では同時代における内藤千代子という作家のポジションを、その受容層との関係において考察を行っていく。内藤の作家としての大きな特徴として、支持をしていた読者層が若い青年男女であった点が挙げられる。内藤千代子が文壇作家とは異なり、明治末期のユースカルチャーにおいて支持され、読まれた作家であったことを、同時代における史料やジャーナリズム報道を通じて描き出していく。

内藤千代子が『女学世界』における投稿家のスターであった

ことは3節で示した通りである。「私等のクラスには、大分内藤千代子様崇拜者がいますよ、もしお作がないと、皆落胆いたします、何卒毎月御願ひします。」(1913年4月)など、女学生をはじめ若い女性読者から内藤は大きな支持を受けていた。

女性読者の支持の背景には、作品を好むという理由はもちろんのこと、自分たちと同年代の少女が投稿で活躍し文才を発揮するという事に対する憧れもあったと思われる。こうした憧れが、作品のみに留まらない作者本人に対する関心や熱狂的ファンを生み出していた。

昨年頃から本誌を御愛読の方は内藤千代子さんお名を御忘れにはなりますまい、君の御麗筆を心の日記と心の秘密とで拝見して関心いたしましたら、その次に驚く手紙で何と評していいか、ことに六月号の逝く春を読みまして益々君の平凡な方でないのを痛切に感じました、女らしくて、どこかシツカリした方でせうね、私なんだか御なつかしくて御なつかしくて。福井滯子(1909年9月)

『女学世界』の読者欄にはこうしたファンレターめいた投稿に留まらず、「記者様に申し上げます、いつも倶楽部に内藤千代子様の写真を誌上で拝見したいと愛読者の御望みですのに、何故誌上にのせられないのですか。」(1910年6月)など、写真掲載を求める声が多数寄せられるなど、雑誌の一投稿家であった内藤千代子は『女学世界』において絶大な人気を集めていた。

内藤千代子は『女学世界』をはじめとする女性読者から人気が高い存在であったが、また多くの男性読者からの支持も集めていた点は注目に値する。少年時代の川端康成も旧制中学に在学していた1916(大正5)年に内藤千代子の『ホネームーン』や『エンゲージ』を読んだことを日記に記している^[22]。「ふと内藤千代子のホネームーンやエンゲージで讀むだような、[大]男學世と女學生との交際がなつかしいものとして現れる。自分もあ[こ]んなに交つてみたいと思ふ。」という記述に、内藤の作品に描かれた男女交際に憧れる川端の心情が示されており、内藤受容の様相を示すものである。このように内藤の読者層は、『女学世界』読者や女学生に留まらず、一高生や帝大生をはじめとした男子学生層にも広がりを見せていた。

川端が日記に記しているように、内藤作品の特徴として、青春の男女の恋、男子学生との交際を描いた点が挙げられる。日記形式をはじめ、内藤自身を思わせる主人公が一高や帝大の学生と交流する様が内藤作品のメインモチーフであった。

内藤千代子が登場した時代は、男女交際をめぐる議論が活発となっていた時期である。1889(明治32)年の高等女学校令公布以後女学生が増加し、それに伴い男子学生と女学生の交際を巡る議論が行われるようになった。それまで男子学生の交際相手や恋愛対象であった芸娼妓や遊郭の女性にかわって、学校教育を受けた女学生が登場した^[23]。前川直哉は近代日本における男女交際言説の変化を分析し、1906(明治39)年の『中央公論』や博文館より出版されていた青年向け雑誌『中学世界』で男女交際に関する記事が急増していることを指摘してい

る^[24]。内藤千代子が1908(明治41)年から『女学世界』誌上に発表していた作品群は、青春の男女の恋や交際を主題としたものであった。若い女性が男女交際という当時において先進的で注目度の高いテーマを描くということはスキャンダラスであり、内藤に対するバッシングを生んだ一方で^[6]話題性も高く、ジャーナリズムから内藤が注目される要因となった^[7]。

内藤は一高や帝大の学生を交流・交際の対象とするだけでなく、彼らを通じて学んだ男子学生文化を作品に取り込んで描いている。「村娘野嬢ではどうして中々知つて居さうな筈のない書生仲間の隠語や省略言や、ズンと穿つた通語さえノベツ幕なしに千代子の文には現はれている。」^[25]と新聞記事にも書かれるように、明治末期の学生風俗を描いた作風が話題となった。安岡章太郎の「青葉しげれる」には「おふくろは若いころ読んだ内藤千代とかいう人の『くげぬま物語』^[8]という小説に出てくる一高の生徒のことが忘れられず(略)生まれた子供の順太郎を、かならず一高へ行かせよう(略)と念願した。」という記述が見られる^[26]。このように内藤千代子が描いた一高をはじめとするエリート男子学生との交際は読者に鮮烈な印象を残した。

1912(明治45)年11月17日より大阪毎日新聞に連載された「謎の少女」という記事の中で、内藤千代子は青鞥社の尾竹紅吉と並んで取り上げられ、23日から27日までの計5回にわたって内藤に焦点を当てた記事が掲載されている。「鶴沼の千代子訪問 思いがけぬ若い美人」と書かれた内藤は、記事のインタビューにおいて、非常に多くの手紙をもらうこと、中には熱烈なものもあり、「ラブレターかと思はれるやうなナマめかしい文句」の手紙が届くことを述べている。また1912(明治45)年1月21日の『読売新聞』のコラムには、鶴沼から上京し、本郷森川町に下宿している内藤の元に「赤門の文科生某」が「毎日光来館の前に光来ましまし彼れが姿をチラとばかり拝んだ丈けで恐悦至極はては眼を白黒にする」様が描き出されている。これらの史料が示すように、内藤千代子には熱心な男子学生ファンが多くついていた。

同時代における内藤千代子のポジションや作家像を端的に示す記事が、1914(大正3)年10月19日の『朝日新聞』に掲載されている。

青春の世界の憧憬が、千代子の心の奥に潜んで居た創造的才分を衝動した。(中略)一高生徒、下町育ちの少女、かるた会、寮歌、淡い少女の恋をハーモニカに吹いて、磯松原の涙の雫、女学生の心持ちを女学生の常套語ですらすらと書いた其小話が女学生の間で騒がれた、すると又女学生の心持や常套語を知らうとする男の学生の間にも騒がれ始めた、大臣の名を知らぬ学生はあつても、内藤千代子の名を知らぬものは無いやうになつた。

この記事が如実に示すように、現在では文学史の中に全くその名を残していない内藤は、当時においては若い男女学生の間では人気があり、「大臣の名を知らぬ学生はあつても、内藤千代子の名を知らぬものは無い」と言われるほどに有名な存在で

あった状況が伺える。

4.2 1910年代の女性表現のなかの内藤千代子

本項では内藤千代子を1910年代の女性作家のなかに位置づけるを試み、この作業を通じて作家内藤千代子が近代日本の女性表現に提示する視座を検討していく。

内藤千代子という作家は、一高や帝大生との交際を作品に描き、それが同時代の若年層から支持を受けて人気を博し、その著作は高い売れ行きを示すなど商業的成功をおさめた人物であった。内藤千代子を女性作家の系譜のなかで論じるために、大正期に『花物語』で少女読者の支持を集めた吉屋信子を補助線として用いる作業を通じ、内藤千代子という作家のポジションを描き出す。

吉屋信子(1896-1973)は少女小説『花物語』で人気を博し、以後は少女小説に留まらず大衆小説の世界にも進出して大正・昭和期を通じて活躍をした作家である。多くの女学生に愛読された『花物語』は、二十歳の吉屋信子が『少女画報』の編集部宛に作品を投稿し、採用が決まるという経緯のもとで連載が始まっている。内藤のデビューから約5年が経過した1916(大正5)年7月に第1話「鈴蘭」が掲載されて読者の評判を集め、以後およそ9年にも及ぶ長期連載となった。『花物語』は連載途中の1920(大正9)年2月に洛陽堂より出版がなされた。久米依子は「文壇の既成の階層性やジェンダー制度とは離れた場で成功した女性作家という、吉屋のユニークな価値も生じている。」¹²⁷⁾と述べ、女性読者層という支持のもと、吉屋信子が文壇外における流行作家という地位を確立したことを指摘している。

内藤千代子と吉屋信子は、作家のキャリアをスタートする時点において、投稿という手段のもとで雑誌に掲載された作品が読者の支持を集めたこと、文壇とは異なった場で人気を獲得した作家である点において共通がみられる。文壇を介しないルートによって名を成し、商業的成功をおさめるという経路の開拓において、内藤は吉屋など大正期にキャリアを始める作家に先行しており、内藤千代子が有していた先進性は注目し値する。

内藤と吉屋の相違点として、男性読者層の有無が挙げられる。内藤は吉屋が有していなかった男性読者にも熱心なファンを有していたことは前項で示した通りである。また両者の最も大きな相違は、作家としてのその後のキャリアの積み方にあるといえる。吉屋信子は『花物語』の連載中である1919(大正8)年、大阪朝日新聞の懸賞小説に1等入選をした「地の果てまで」で大衆小説の書き手としてもポジションを築き、以後も大正・昭和期を通じて大衆小説をフィールドに流行作家として活躍をし、死の直前まで執筆活動を続けている。

それに対し内藤千代子は、『スカートホーム』が爆発的に売れ、その作風が一斉に風靡したものの、その後作家としては行き詰まりをみせている。学校教育を受けずに鶴沼で育ち、さらに文壇や文学サークルなどとの繋がりもなく文章修業の場を持たなかった内藤にとって、手持ちの素材は身の周りの出来事や見聞きした学生風俗を取り入れた若い男女の恋愛など、限られたものであった。創作にあたっての素材の乏しさは作風の固定化とマン

ネリズムへと繋がった。作風のマンネリズムが飽きられ読者離れが生じたことが、作家活動の継続を困難にした要因の一つと思われる。

同時代に多くの読者を獲得した内藤千代子の名が現在なぜこれほどまでに忘却されているのか。その理由として、内藤千代子が文壇作家ではなく、ユースカルチャーのなかで誕生し、受容が行われた作家であったという立ち位置の問題が考えられる。内藤千代子は文学雑誌への寄稿ではなく、『女学世界』をはじめとする非文学的・非文壇的な雑誌を活躍の場とした。人気作家となつてのちも、若者文化のうちで先進的なトピックを扱うことに個性を発揮した作家であり、文壇的な世界や評価に接近するという傾向は最晩年まで見いだせない。それゆえ、文壇を基盤とした文学史においてその範疇におさめられる契機は内藤には訪れなかった。

もっとも、こうした内藤千代子の作品が既存の文壇的枠組み、近代文学研究の領域による価値判断によって「文学」として検証された際の評価には一定の有効性があるだろう。しかしまたそれとは位相の異なる問題として、そのような価値判断によって「文学」とみなされない書き手が文学研究において検討の対象として排除されがちであることもまた十分自覚されるべきであろう。現在における文学史的評価と、同時代における人気や評価が異なったものであること、内藤千代子という作家をそのテキストの文学的価値ではなく、作家としての出現プロセスや明治末期のユースカルチャーとの関わり、文化や風俗との関わりにおいて再評価する可能性をここでは示した。

5. おわりに

ここまで、内藤千代子をめぐって、彼女が明治期の常套的作家養成ルートとは異なった、文学的権威とは離れた場で流行作家となったことを示し、それが当時作家として多数の受容者にむけて表現する可能性においていかなる意義や可能性を示すものであるのか考察を行ってきた。内藤千代子は、後の文学的評価如何にのみ回収されるべきでない、明治期の作家デビューのプロセスにおいて先進性を有した存在であるといえる。1910年代の女性表現のなかで、今後さらに議論が深められていくことが求められる。

明治後期の作家デビューにおいて不可欠であった文学的権威との関わりとは異なるルートを開拓し、男女交際や一高、帝大の学生文化をはじめとする先進的なトピックを扱い同時代の風俗を描写した作家として、内藤については既存の文学的評価とは異なった枠組みによる再検討が求められるべきであろう。このことはまた、マスメディアにおいて情報の送り手と受け手が現代に比して截然と分かれていた時期において、本来受け手に留まるはずであった層が、送り手としての位置を得るための回路を開拓し、特有の立ち位置や機能を築いてゆくプロセスを考察することでもある。内藤はこうした回路の開拓を行なった人物として捉えられねばならない。後世に名の残った人物に傾斜しがちな作家論、文学論に偏ることなく、明治期の情報メディアの受容、利用のあり方を分析する足がかりともなるだろう。

一方、この点に重きを置いたため本稿では、この題材が孕むはずのジェンダー的視点や鵠沼という地域の文化特徴等、多くの視点をまとめることができていない。これらを個別に粹付け、考察してゆくことも課題となる。

今後は本稿では十分に論じることができなかった忘却の過程や要因をはじめ、作品分析を含めた内藤千代子のさらなる検討を試みていきたい。

注

- (1) 内藤千代子を論じるうえで彼女が社会から忘却されゆく過程や要因も重要な論点であるが、本稿では出現のプロセスとその受容の様態に重点を置き考察する。内藤の忘却に関しては扱いきれぬ範囲を超えるため、本稿では詳述しない。別稿への課題としたい。
- (2) 本稿では読者が雑誌に日記や小説・作文等を送ることを「投稿」、また文芸的な才能や作文的な能力があまり求められない読者欄における葉書は「投書」と記している。
- (3) 以下出典を表記せず引用する投書はすべて『女学世界』読者欄に掲載されたものである。旧漢字を概ね現代の常用漢字に改め、歴史的仮名遣いはそのまま残した。また一部句読点を補っているものがある。
- (4) 河岡潮風（1887-1912）は博文館の社員であり、『冒険世界』の記者としての活動の他『女学世界』への寄稿、また雄弁活動を行うなど多才な編集者であった。内藤千代子の著作を刊行するなど、時代を読む編集者感覚に優れた人物であったが1912（明治45）年に25歳の若さで亡くなっている。『冒険世界』の編集者としての河岡の活動は井上(2002)に詳しい^[28]。また河岡による自伝『五五の春』もある^[29]。
- (5) 本の現物を調査し、奥付けで増刷状況を確認できたのは1912（明治45）年3月の13版までである。以後は『女学世界』に掲載された広告の数字を用いている。広告であるため実際より誇張されている可能性はあるものの、一つの指標になるであろう。なお広告と実際の奥付けを比較したところ、広告の数字と実際の増刷状況には大きな乖離は見られなかったため、広告の部数は妥当性のある信頼できる部数であると思われる。
- (6) 『女学世界』1910年8月の読者欄には「内藤様に申し上げます、貴女はいつもいつも私如き田舎娘のとなと訳のわからぬ六ツかしき英語だのを御入れ遊ばして、御作を御出しなさるので、誠に困ります、十八娘なのに、私と大変なちがひ、どうしてあんなに男子の事なんかよくしつて入られるのでせう、都の娘はちがつたものですね、私あんなハイカラ娘大々的すきませんから、以後御作を御出しなさらん様に願ひます。処女のくせに…」という批判的な投書が掲載されている。男女交際を描くことはスキャンダラスなことであり、内藤はバッシングを受けることがたびたびあった。
- (7) 内藤千代子は生涯学校に通うことはなかったため、自身は「女学生」ではなかったことは本稿で指摘した通りである。しかし若い女性が男子学生との交際を描くという点において、男女交際というモチーフを取り入れたものであると見なすことができよう。
- (8) ここでいう「くげぬま物語」は『ホネームーン』収録の「鵠沼日記」のことだと思われる。「田舎住居の処女日記」が初出で、単行本収録にあたって「鵠沼日記」と改題された。

参考文献

- [1] 平田由美『女性表現の明治史 樋口一葉以前』岩波書店、(1999).
- [2] 北田幸恵『書く女たち 江戸から明治のメディア・文学・ジェンダーを読む』、学芸書林、(2007).
- [3] 関礼子『一様以後の女性表現 文体・メディア・ジェンダー』、翰林書房、(2003).
- [4] 飯田祐子「愛読者諸嬢の文学的欲望 ―『女子文壇』という教室―」『日本文学 47』、pp22-35、(1998.11).
- [5] 板垣直子『明治・大正・昭和の女流作家』、桜楓社、pp112、(1967).
- [6] 小山文雄『個性きらめく ―藤沢近代の文士たち―』藤沢市教育委員会、(1990).
- [7] 横田順彌『明治時代は謎だらけ』、平凡社、(2002).
- [8] 森山敬子「女学世界に咲いた花 ―内藤千代子について―」『史の会研究誌』2号、pp100-128、(1993).
- [9] 仙波千枝『良妻賢母の世界 近代日本女性史』、慶友社、(2008).
- [10] 黒岩比佐子『「食道楽」の人 村井弦斎』、岩波書店、pp4、(2004).
- [11] 安田義明「女子文壇」馬渡憲三郎編『女流文学研究』、南窓社、pp367、(1973).
- [12] 近松秋江「九雑誌を評す」『近松秋江全集 第9巻』八木書店、pp381、(1910=1992).
- [13] 大宅壮一「文壇ギルドの解体期」千葉俊二、坪内祐三編『日本近代文学評論選 昭和篇』岩波書店、pp9、(1926=2004).
- [14] 木村毅『私の文学回顧録』青蛙房、pp30、(1979).
- [15] 松原岫雲「磯千鳥氏の事ども」『女学世界』博文館、pp78、(1919.3).
- [16] 『女学世界』博文館、pp46、(1908.11.15).
- [17] 前掲書 [15]、pp78.
- [18] 坪谷善四郎編（未刊行）『博文館五十年史初稿 全4巻』三康図書館所蔵『博文館五十年史初稿（3）』第7編明治45年の項 pp191.
- [19] 内藤千代子『生ひ立ちの記』、pp169、(1914).
- [20] 関肇『新聞小説の時代 メディア・読者・メロドラマ』新曜社、pp102、(2007).
- [21] 石川弘義、尾崎秀樹『出版広告の歴史 1895―1943年』、出版ニュース社、pp112、(1989).
- [22] 川端康成記念会編『川端康成全集補巻1』、新潮社 pp417-418、(1916=1984).
- [23] 前川直哉『男の絆 明治の学生からボーイズ・ラブまで』、筑摩書房、pp97、(2011).
- [24] 前掲書 [23]、pp88.
- [25] 大阪毎日新聞1912年11月24日「謎の少女」.
- [26] 安岡章太郎「青葉しげれる」『安岡章太郎集2』岩波書店、pp401、(1958=1986).
- [27] 久米依子「少女小説から従軍記へ ―総戦力下の吉屋信子の報告文」飯田祐子、島村輝、高橋修、中山昭彦編著『少女少年のポリティクス』、青弓社、pp.148-166、(2009).
- [28] 井上義和『英雄主義の系譜 ―「雄弁」と「冒険」の明治四十年代』竹内洋、稲垣恭子編『不良・ヒーロー・左傾 教育と逸脱の社会学』、人文書院、pp60-82、(2002).
- [29] 河岡潮風『五五の春』、博文館、(1912).

嵯峨 景子（さが けいこ）

東京大学大学院学際情報学府博士課程在籍。専門は歴史社会学、文化史研究、少女文化、雑誌における投稿・投書など。